第二次世界大戦とイスラーム
ナチス＝ドイツ軍のモスレム兵

神田高校　根岸洋史

一　はじめに

数年前、我が世界史研究推進委員会の共同研究テーマが、イスラームの教材化と決定された時、実は少々途方に暮れた。なぜならば、私が本来専門とする第二次世界大戦史の分野とイスラームとを、結び付けられる要素が全く思い浮かばなかったからである。

しかしながら、委員会のメンバーでありながら、共同研究テーマを全く無視するわけにもいかないので、何か第二次世界大戦とイスラームとの接点はないかと、あれこれと調べ、また記憶の糸をたどっていったところ、中学生のころに読んだサンケイ出版（現扶桑社）の第二次世界大戦ブックス第三五巻『ナチ武装親衛隊』（ジョン＝キーガン著）一四〇頁に載っていた一枚の写真のことを思い出した。それは、第二次世界大戦中のユーゴスラビアにおいて、現地のイスラームの義勇兵を募って編成された第二三SS山岳師団〝カマ〟の兵士たちの写真である。

ナチス＝ドイツ軍、特に武装SSにおいて、戦争中盤以降、数多くの非ドイツ人兵士の義勇軍が編成されたことは広く知られているが、その中に多くのイスラーム兵が存在していたことは、これまであまり注目されてこなかった。

そこで今回、この歴史の闇に埋もれた兵士たちにスポットを当ててみたのが、本レポートである。

二　ドイツ軍部とイスラーム

現代史において、ドイツとイスラームとの接点は、第一次世界大戦直前の3B政策の推進に伴うオスマン＝トルコ帝国への接近から始まる。

特に第一次世界大戦開戦直後の一九一四年八月には、軍艦の購入問題でイギリスとトラブルになったトルコを味方に引き込もうと、皇帝ヴィルヘルム二世が、大戦勃発により本国への帰還が絶望的になったドイツ地中海戦隊の巡洋戦艦ゲーベンと巡洋艦プレスラウとをトルコのイスタンブールに寄港させ、これをそのまま乗員ごとトルコ海軍に編入させ、これが同年一〇月の同盟国側へのトルコの参戦の決定打となったことは、よく知られている。（ちくま学芸文庫バーバラ＝タックマン『八月の砲声』上三〇〇～三五〇頁参照）

※この軍艦購入をめぐるトルコとイギリスとのトラブルとは、当時トルコがイギリスに戦艦二隻（サルタン＝オスマン一世とレシャディー）を発注し、それが一九一四年八月の時点でほぼ完成し、トルコへの引渡しを待つ段階（実際に両艦を利用してのトルコ海軍側の乗員の慣熟訓練まで始まっていた）になっていたにもかかわらず、当時のイギリス海相チャーチルが、軍艦の不足を理由に、強引にイギリス海軍に接収してしまったということである。なお、イギリス海軍に接収されたこの二隻の戦艦は、サルタン＝オスマン一世はエジンコート（百年戦争の古戦場アザンクールの英語名）と、またレシャディーはエリン（アイルランドの雅名）と命名され、一九一六年六月のユトランド沖海戦などに参加したが、戦後は旧式化が目立ったため、一九二一年のワシントン海軍軍縮条約によって解体された。ちなみ

に、トルコに引き渡されたゲーベンの方は、スルタン＝ヤウズ＝セリム一世と改名された後、何と二つの世界大戦を生き抜き、一九五〇年代まで現役にあったと言う。

またトルコの参戦後は、トルコ軍へのドイツ製兵器の供与の他、一九一五年八月～一六年一月の英仏軍によるガリポリ上陸作戦の迎撃に、ドイツ軍事顧問団による作戦指導が行われたことが知られている他、トルコ軍のイラン侵攻の際、ドイツの工作員ワスムスが遊牧民に対して工作活動を行ったこと。（中公新書　宮田　律『物語イランの歴史』一三一頁）また、細かなことでは、ヘルメットなどの軍用品の供与まで行われたという。

※第一次世界大戦の際、製造されたドイツ式ヘルメットの中には、俗に〝トルコ軍用〟と呼ばれているモデルが存在している。このヘルメットは、通常のドイツ式ヘルメットに比べ、前ひさしの部分が小さくなっている点に大きな特徴がある。これは、イスラームが多いトルコ兵が、ヘルメットを被ったままでも礼拝が行えるようにデザインされたと言われている。しかしながら、トルコ兵が実際にこのヘルメットを使用している写真等は、現在のところ見つかっていないので、これが実際にトルコ軍に供与されたかどうかは不明である。なお、このヘルメットの使用例を示す写真としては、第一次世界大戦後のドイツの内戦時に右翼の義勇兵団（フライコーア）によるものが残っている。

また第二次世界大戦における、ナチス＝ドイツとイスラーム世界との接点は、まず一九四一年四月～五月にかけてのイラクの反英反乱が挙げられる。

このイラク首相ラシッド＝アリによるイギリス軍の進駐拒否から始まった反乱は、最終的にはイギリス軍のイラク侵攻と、ラシッド＝アリのイランへの亡命で決着することになるが、この際、ドイツは、ラシッド＝アリの反乱を支援する名目で、実際にドイツ空軍の部隊をイラク北部のモスルにまで展開させており、その際、派遣されたドイツ空軍機にはイラク軍の国籍マークまで記入されていた、と言われている。また、ドイツ軍内部に最初のイスラーム義勇兵が出現したのもこの時期である。

このイラクの反乱と前後して発生したのが、英ソ両軍によるイラン侵攻（一九四一年八月二五～二七日）である。この英ソによるイラン占領の目的とは、イラクのバスラ港からカフカス地方への補給ルートの確保の他に、親独的だったイラン皇帝レザ＝シャー（イラン革命で追放されたムハンマド二世＝パーレビ国王の父親）の排除が狙いであったことはよく知られている。

このレザ＝シャーの親独政策が英ソなど連合国から警戒された背景には、レザ＝シャーの民族主義的政策（アーリア人国家としてのイラン）が、ナチスのイデオロギーと結び付いたことによる、イランの政・財・官・軍へのドイツ人顧問の影響力の浸透ぶりにあったと言われている。

※この英ソ軍のイラン侵攻の時点で、首都テヘランとその近郊だけで約一〇〇〇人のドイツ人顧問が活動していた。（『物語イランの歴史』一七一頁）

また、ロンメル将軍率いるドイツ＝アフリカ軍団が侵攻したエジプトでは、イギリスの冒険小説家ケン＝フォレットの『レベッカへの鍵』などで知られるように、国防軍情報部がムスリム同胞団などの反英勢力との接触を試みたことが知られている。後にエジプト革

命で自由将校団の中心メンバーとして活躍し、ナセル亡き後のエジプト大統領（任一九七〇～八一年）となったサダトは、この時期、ドイツ側と接触を持った嫌疑をかけられて一時、軍籍を剥奪されている。

三　モスレム＝ドイツ兵出現の背景

第二次世界大戦において、なぜ大量のイスラームの兵士がドイツ側に身を投じたのか。また、なぜドイツ軍当局がそれを許したのかについては、次の様な背景が挙げられる。

まずドイツ軍側が、常に慢性的な兵員不足の問題を抱えていたことである。特に武装親衛隊（武装ＳＳ）では、それが深刻であった。

武装親衛隊の兵員数については、一九三四年のレーム事件の後、国防軍が、将来親衛隊が国防軍の地位を脅かすことの無いよう、その兵員数を国防軍のそれに対して、五～一〇％に抑制するように申し入れ、これが両者の間の紳士協定として成立していた。その結果、親衛隊は常に兵員の不足に悩むことになる。

そこで親衛隊が苦肉の策として採用したのが、外国人の〝義勇兵〟である。すなわち、外国人の兵士であれば、国防軍との協定に束縛されること無く、必要な数だけ兵士の動員が可能となるからである。

当初、この外国人義勇兵は、〝ゲルマン系〟とされる西欧・北欧諸国出身者に限定されていたが、大戦中盤の一九四三年以降は、スラヴ系などにもその対象が拡大され、皮肉なことに、本来〝ドイツ民族〟の純潔性を建前とするはずの親衛隊に、モスレムなど大量の非ゲルマン系の外人部隊が出現する結果となったのである。

またこの他の背景としては、ドイツ軍の捕虜となった英仏の植民地出身のモスレム兵が、宗主国への反感などから志願したケースや、数的にはこれが大多数を占める結果になったが、ソビエト連邦政府の非宗教化政策に反発した中央アジア出身のソ連兵が、捕虜の身から、あるいはドイツ側に投降して、身を投じたケース。または、ユーゴスラビア国内の民族・宗教問題から、ユーゴ国内のモスレム系の民族が、ドイツ軍に志願したケースなどが存在する。

四　ドイツ軍モスレム部隊の編成

ドイツ軍最初のモスレム部隊とは、一九四一年夏にアルジェリア出身者などの旧フランス兵捕虜から編成された特殊目的部隊二八八であると言われている。

この部隊は、イラクの反英反乱支援を目的に編成されたとされており、一九四二年には、さらにこれを中核に、自由アラブ部隊、特殊目的部隊二八七が編成された。

また一九四一年に、インドからチャンドラ＝ボースがドイツに亡命すると、彼の呼びかけにより、インド兵捕虜からインド独立義勇軍の募集が開始され、一九四二年九月には、ドイツ国防軍第九五〇大隊として編成され、その後一九四三年までに、その兵力は二五九三名に達したことから、この部隊は、第九五〇歩兵連隊へと改称の上、再編成される運びとなった。なお、この二五九三名のインド兵のうち、モスレムは全体の五分の一弱の四九七名であったと言われている。（講談社選書　芝　健介『武装ＳＳ―ナチスもう一つの暴力装置』二三三頁）

一九四一年六月二二日の独ソ戦の勃発は、ドイツ軍にさらにモスレム兵部隊を出現させることになる。独ソ戦勃発に伴い、ドイツ兵

たちがロシア国内に進撃していくと、予想を超える大量のソ連兵が、ドイツ軍に投降してきたばかりか、自発的にドイツ軍に協力を申し出るケースすら見られた。これには、スターリンの厳格な独裁への反発や、先述したようにソ連政府の非宗教化政策への反発が、その背景にあった。

ドイツ軍は、当初これらの旧ソ連兵の協力者、ヒヴィス（志願補助員）を運転手・コックなどの軍属として雇用したが、戦線後方でのパルチザンの活動に手を焼くようになると、彼らを対パルチザン作戦の任務に就かせることを着想し、四一年一一月には、第四四四トルクメン大隊、第四四四カフカス大隊がそれぞれ編成され、対パルチザン作戦で大きな戦果をあげるようになった。

そこで国防軍当局も、彼らヒヴィスを主体とする義勇兵部隊（オスト大隊）の編成を認可し、最終的にはソビエト連邦各地の民族、約一〇〇万人がこれに参加する結果となり、その中でモスレム兵が占める割合は、約三五万名に達した。（『武装SS』二三一頁）

一方、バルカン半島においては、一九四一年四月のドイツによるギリシア・ユーゴスラビア制圧は、比較的スムーズに展開したものの、その後ドイツ軍が、独ソ戦準備のために兵力を引き上げたため、独伊軍は、この方面での治安を確立出来ず、ティトーのパルチザンなどの抵抗運動の跳梁を招き、以来ドイツは終戦まで、この方面での抵抗運動組織への対応に苦慮することになった。

そこでドイツが目に付けたのが、ユーゴスラビア国内の民族・宗教対立である。即ち、ユーゴ国内の民族・宗教対立を煽ることによって抵抗運動の分断を試みたという次第である。

その結果、一九四三年、事実上のドイツの傀儡国家であったクロアチア独立国から、モスレム兵の義勇軍、クロアチア義勇師団が武装SS内で編成され、同年一〇月には、第一三SS山岳師団ハンジャール（三日月刀の意）に改称され、武装SS初の非ゲルマン系義勇軍部隊となった。

その後、ユーゴ方面では、一九四四年四月にアルバニア人を主体とする第二一SS山岳師団スカンダーベク（一五世紀のアルバニアで、トルコの支配から独立を目指して戦った民族的英雄の名）が、また同年6月には第二三SS山岳師団カマ（短剣の意）の、二つのイスラーム系義勇兵部隊が編成されるに至った。

五　ドイツ軍モスレム部隊の戦歴と運命

では、これらのドイツ軍モスレム部隊は、どの様に戦い、どんな運命を辿ったのであろうか。

①旧フランス兵捕虜（特殊目的部隊二八八および二八七）の場合

この両部隊は、編成途上で本来派遣されるはずであったイラクの反英反乱が終息したため、ドイツ＝アフリカ軍団に編入され、北アフリカ戦線に投入され、最終的に一九四三年五月のチュニスにおけるアフリカ軍団の降伏と同時に米英軍に降伏した。しかしながら、一九四二年に入ってこの両部隊から抽出された兵士により、新たに八四五大隊がフランスで編成され、こちらは終戦まで存続したと言う。

②旧インド兵（第九五〇歩兵連隊＝インド独立義勇軍）の場合

インド独立義勇軍に参加した兵士たちの多くは、イギリス支配からのインドの〝解放〟のための作戦参加を望んでいたと言われているが、部隊の編成途上での、スターリングラード戦におけるドイツ軍の敗退によるカフカス侵攻作戦の挫折、さらには北アフリカ戦線

の崩壊によるエジプト侵攻作戦の挫折により、彼らが望んだ〝インド解放〟作戦の実行は絶望的な状態となった。結局、彼らは一九四三年春以降〝大西洋防壁〟に配属され、米英軍による大陸反攻作戦の迎撃の任務に従事することになるが、その際、フランスへの配属を拒否した兵士四七名が、軍法会議にかけられたという。

その後、一九四四年六月のノルマンディー上陸作戦以降、このインド兵たちは、実戦には投入されなかったものの、フランスからの撤退時の混乱で兵員と装備の大半を失って事実上壊滅したという。しかしながら、それでも残余の兵士たちは、その後、武装SSに編入されたが、あくまで彼らを宣伝対象としてしか見なかったヒトラーなどナチス幹部の偏見から、ついに実戦参加のないまま、終戦を迎えることになった。

③旧ソ連兵による義勇軍（オスト大隊）の場合

オスト大隊の編成は、一九四二年七月にウラソフ将軍がドイツ軍に投降し、スターリンの戦争指導への不満からドイツ側に協力を申し出、その旨をスモレンスク宣言（一九四二年一二月）で表明すると、各地でソ連兵の大量投降が相次ぎ、そのピークを迎えた。

しかし、一九四三年七月のツィタデル作戦（クルスク会戦）が失敗に終わると、親衛隊長官であったヒムラーが、これを作戦に参加したオスト大隊の裏切りによるものと強硬に主張した結果、彼らの大半が西部戦線（大西洋防壁）への移動を命ぜられたと言う。その後彼らは、移動先で叙勲や配置転換はおろか休暇すら認められないという境遇におかれたが、ノルマンディー上陸作戦の開始を迎えると、ドイツ軍当局の期待以上の奮闘振りを見せ、ようやくその存在が、ドイツ軍上層部の認めるところとなった。

このオスト大隊の予想外の奮戦の背景には、米英軍が、彼らが自発的にドイツ軍に協力していた事実を認識しておらず、ドイツに強制的に徴募されたものと判断して、〝帰郷の保障〟と引き換えに投降を促したためであると言われている。

その後、オスト大隊の残余の兵士たちは、一九四四年一二月に他の旧ソ連兵による義勇兵らと共に、ウラソフの下で編成されたロシア解放軍（ROA）＝第六〇〇歩兵師団に編入され、東部戦線に投入されたが、時すでに遅く、ソ連軍の猛烈な攻勢の前に何らなすところなく壊滅し、戦後はソ連当局による容赦の無い報復にさらされることになった。

④ユーゴスラビアにおけるモスレム兵の場合

ユーゴでのモスレム義勇兵部隊は、一九四四年以降、対パルチザン作戦への投入が開始されたものの、既に戦争の帰趨がはっきりしていたこともあってか、士気が奮わず、パルチザンへの投降・寝返りが相次ぎ、その補充としてドイツ軍兵士などが配属された結果、モスレム部隊としての実態を失う結果となった。

六　結びとして

結論としては、ドイツ軍モスレム部隊は、戦線に投入されるタイミングを完全に逸していた上、ドイツ軍上層部も彼らモスレム兵に対して正しい理解を持っていたとは言いがたい。例えば、アルバニア人のイスラームによって編成されたモスレム部隊である、第二一SS山岳師団に与えられたコードネームが、アルバニアの民族的英雄とは言え、宗教的には反イスラームだったスカンダーベクの名であったことは、その象徴と言えるであろう。

ところで、今回の調査を通じて感じたことは、調査を開始する以前からある程度予想していたことではあるが、この分野の研究については、未だに学術的な信頼に足る資料が不足していることである。この背景には、ナチスへの加担というタブーや、戦犯としての訴追を恐れた当事者が、戦後も長く口を閉ざしているということが考えられる。しかしながら、これらの問題については、今後ロシアなどでの情報の公開が進めば、新たな事実の発見が期待できるであろう。

また研究の発展としては、連合国とイスラームとの戦争協力の究明が考えられる。例えば、パリを解放した自由フランス軍の兵士の中に、かなりの割合でアルジェリア出身者が存在していたという事実がある。

一般に自由フランス軍は、ド＝ゴールがイギリスに脱出した際に、彼に従った兵士たちを中心に編成されたとの“神話”が信じられているが、実際に自由フランス軍が、実体を持った軍隊へと変わったのは、一九四二年一一月の米英軍による北アフリカ侵攻（トーチ作戦）以降、アルジェリアなどで連合国に投降したフランス兵を再編成して以降のことである。また、この自由フランス軍は、主にアメリカから兵器や軍用品の提供を受けていたが、戦時中、アメリカ軍が開発した野戦食（レーション）のメニューの中に、明らかにイスラーム系の兵士用のものが存在している。この辺りから、連合国とイスラームとの関係を調査してみるのも一興であろう。

〈主要参考文献〉

ユルゲン＝トールヴァルト『幻影―ヒトラーの側で戦った赤軍兵たちの物語』　フジ出版社（一九七八）

ハインツ＝ヘーネ『髑髏の結社　SSの歴史』　講談社学術文庫（二〇〇一）

芝　健介『武装SS―ナチスもう一つの暴力装置』　講談社選書（一九九五）

J＝キーガン『ナチ武装親衛隊』　サンケイ出版（一九七二）

山下英一郎『SSガイドブック』　新紀元社（一九九七）

ロナルド＝H＝ベイリー『ライフ第二次世界大戦史　パルチザンの戦い』　タイム＝ライフ（一九七九）

B＝タックマン『八月の砲声』　ちくま学芸文庫（二〇〇四）

『第二次世界大戦歴史地図』　原書房（一九九四）

ジョン＝ピムロット『地図で読む世界の歴史　第二次世界大戦』　河出書房新社（二〇〇〇）

木村英亮『ソ連の歴史―ロシア革命からペレストロイカまで』　山川出版社（一九九一）

柴　宣弘『ユーゴスラヴィア現代史』　岩波新書（一九九六）

柴　宣弘『図説バルカンの歴史』　河出書房新社（二〇〇一）

二一世紀研究会『民族の世界地図』　文春新書（二〇〇〇）

宮田　律『物語イランの歴史』　中公新書（二〇〇二）

『第二次世界大戦事典』　朝日ソノラマ（一九九一）

『世界軍事略語辞典』　国書刊行会（一九九一）

『世界民族問題事典』　平凡社（一九九五）

『世界のマイノリティ事典』　明石書店（一九九六）

『新版ロシアを知る事典』　平凡社（二〇〇四）

Vom Stahlhelm zum Gefechtshelm Band1（1915―1945）　Ludwig Baer（一九九四）